

夏目漱石「倫敦塔」——塔橋をめぐるレトリックの意味

加 納 孝 代

作品「倫敦塔」の周辺

「倫敦塔」。これはすげえものだと、わたしは一も二もなく感服した。おもへば、西洋のはなしには至つてよかった。今から何十年かまへ、わたしが中學校にはひつて匆匆のことだから、年代は大正とあらたまつて間もないころである。漱石先生のものといふと、わたしはいまだに、「倫敦塔」からかぞえる癖がついてゐる。そして、當時すでに有名であつた「猫」はこれもおなじころに讀んだことは讀んだが、今日となつて「猫」の印象はあまりよく残つてゐない。

石川淳は「倫敦塔その他」のなかで右のようにのべている。^①△「倫敦塔」。これはすげえものだと、わたしは一も二もなく感服した」という言葉がいかに中学生の男の子らしい感激ぶりを伝えており、面白い。しかも、あの時は中学生だったから感激したのであつて大人になつて讀んでみたら大した作品ではなかつた、と言っているのではない。石川淳は自分の中学生の時の印象ならびに「倫敦塔」に対する評価を、この文章を書いた時点でも妥当な

のと考えたからそれを記したのであるし、それはまた「漱石先生のものといふと、わたしはいまだに、「倫敦塔」からかぞえる癖がついてゐる」という言葉からも明らかであろう。

夏目漱石の「倫敦塔」は明治三十八年（一九〇五）一月十日発行の『帝國文學』に発表され、翌年漱石の最初の短編小説集『漾虚集』におさめられた。四百字詰め原稿用紙に換算すれば三十二、三枚の分量のこの作品は、作品の末尾に記されている「三十七年十二月二十日」という日付が示唆するように、その前後に脱稿したものであらうとされている。荒正人氏らの研究によれば、漱石は明治三十七年の十一月中旬に「吾輩は猫である」（『ホトトギス』明治三十八年一月号掲載分）を書き、十二月に入つて十日すぎに「倫敦塔」にとりかかり、それを二十日ごろに完成させるとただちに「カーライル博物館」を書きはじめて、これもまた約十日で書きあげてゐる。⁽²⁾ 漱石自身この作品には相当の自負をもっていた反面、その出来栄に不安もあり、読者がどう思ふかをかなり気にもしてゐたようで、発表後いちおう好評であると知つてほっとしたりしていることが弟子たちとの書簡のやりとりからわかる。まず十二月十九日に野間眞綱に宛ててつぎのような葉書を書いてゐる。「……倫敦塔は未だ脱稿せず、然しものになります。御一覧の上是非はめて下さい。」ところがその三日後の十二月二十二日には同じく野間に宛てて今度は「……倫敦塔は出来上つた。あとから讀んで見ると面白くも何ともない。先便は取り消す」と書いた。そして野間が、雑誌に出た「倫敦塔」を読んだあとであらうか、漱石を「世に稀なる文學者」とほめた手紙を寄越すと、それに対して「君がはめて呉れたので倫敦塔が急にうまくなつた心持がする」と、三十八年一月十九日付けで返事を出している。そのころ「倫敦塔」をはめる便りがほかにも届き、漱石がそれを喜んでゐることがその翌日の一月二十日に書かれた皆川正禧宛ての手紙によくあらわれている。「倫敦塔の御批評難有候。實は稿を草する折は多少逆上の氣味にて自分でも面白いと思候處、脱稿の上通讀したら、いやな處が多く、且今一いきと云う所で氣が抜けて居

る様で、我ながらいやに成つて居たのです。然る所、本日奇瓢先生から手紙をくれて大變ほめてくれたので、又少し色氣が出た處へ君の端書が來たものだから當人大得意で、以前の逆上に戻りさうに成つて來ました。(いづれも句読点は加納。以下漱石の書簡や日記の引用にあたっては読みやすくするために加納が適宜句読点を付す)

こうして漱石の「倫敦塔」はまだロンドンという都市もロンドン塔という歴史的建築物も見たことのない漱石の若い弟子たちにも、またさきほどの石川淳の例にもあるように一般の読者に対しても、かなり強い印象を与えたようである。また漱石の「倫敦塔」を読んだあと実際にロンドンへ行ってロンドン塔を見物した日本人たちにとって、眼の前にあるロンドン塔と、漱石が文章で描いた倫敦塔とが二重写しになって見えたようだ。たとえば大正二年にロンドン塔を見に行った小杉放庵(未醒、一八八一—一九六四)はつぎのように書いている。

ロンドン塔へ行って見た。夏目さんの倫敦塔を思いつつ行つた。兵隊と見物人が夥しかった、日がカンカン照つて居た。夏目さんは陰気な寂しい日に幻想多き頭を持って此処に来て、「倫敦塔」と云うものを作つた。俺にはつまり夏目さんの倫敦塔と此のロンドン塔とが二つある事になる。そして此のロンドン塔は夏目さんの「倫敦塔」の為に、余計散文的に現実的になつてしまつたのだ。³⁾

また大正十一年に見物した成瀬無極(一八八四—一九五八)はつぎのように記す。

「倫敦塔」に就いて書こうとして私の筆は洩る。故漱石先生の名文が頭に浮ぶと、私のような散文的な見聞を叙述する事が一つの冒瀆のように思われる。(中略)史的追想に耽るには余りに私の知識は貧しい。十四五年前

の事であつたろうか、私は或夜この塔を夢みた。漱石先生の作から生れた幻影だったかも知れない。

小杉放庵は、漱石のあまりに詩趣に富む文章があるために、自分の眼の前にあるロンドン塔がそれとは異なつて、「散文的」で「現実的」なものに見えるのを申しわけなく思っているかのであるし、成瀬無極は、漱石にすでにあのような形でロンドン塔を書かれてしまったあとでは、自分のどんな叙述もそれに及ぶまい、と自分の印象を記すことを放棄している。二人とも少々気の毒なほどだが、ともかくこれらの言葉は漱石の「倫敦塔」が読者に対してそれほどの迫力を与える作品であつたことを証言していると解してよいだろう。

「倫敦塔」と漱石の実体験

ところで前に述べたように漱石が「倫敦塔」を書いたのは、明治三十七年の十二月であるが、この作品の背後にそのほば四年前の漱石自身による實際のロンドン塔見物の体験があることはいうまでもない。漱石がロンドン塔を見に行ったのは明治三十三年十月三十一日である。それはロンドンに到着して四日目のことであつて、そのあたりの数日のことは、彼の日記にはつぎのように記されている。

十月二十八日（日） 巴里ヲ發シ、倫敦ニ至ル。船中風多シテ苦シ。晚ニ倫敦ニ着ス。

十月二十九日（月） 岡田氏ノ用事ノ爲メ、倫敦市中ニ歩行ス。方角モ何モ分ラズ。且南亞ヨリ歸ル義勇兵觀迎ノ爲メ、非常ノ雜沓ニテ困却セリ。夜美野部氏ト市中雜沓ノ中ヲ散步ス。

十月三十日（火） 公使館ニ至リ、松井氏ニ面會、Mrs. Nott ヨリノ書狀電信ヲ受ク。

十月三十一日(水) Tower Bridge, London Bridge, Tower, Monument ヲ見ル。夜美野部氏ト Haymarket Theatre ヲ見ル。Sheridan ノ School for Scandal ナリ。

(傍点、句読点は加納。十月三十一日の記事にてくる Tower がロンドン塔である。なお十月二十九日の「倫敦」と、二十九日と三十一日にでてくる「美野部氏」の表記は漱石の誤りであつて、正しくはそれぞれ「倫敦」「美濃部氏」)

以上の日記の記述から、漱石がロンドンに到着した当日はもう夜であつたので翌日はじめて市の中心部に出てロンドンの雑踏の中を歩き回つたこと、三日目は日本の公使館に向いていくつか事務的な用事をすませ、ようやく四日目になってテームズ河にかかるタワー・ブリッジ(「塔橋」)とロンドン・ブリッジ、そしてロンドン塔や大火記念塔などのいわゆる観光名所めぐりをしたということがわかる。

ロンドンに着いたばかりの漱石の様子、また当時の世界最大のこの都市に対する彼の反応や感想は、同じ頃書かれたいくつかの手紙にも記されている。たとえば三十三年の十月三十日付けで漱石が留守宅の妻鏡子に宛てた手紙の一節――

倫敦も今日出で見たれども見當がつかず。二十辺位道を聞て漸く寓居に還り候。

とか、十一月二十日にベルリンの友人藤代禎輔に宛てて出した近衛騎兵兵營の写真の絵葉書の追伸――

此絵葉書ノ處ハ僕ガ到着ノ翌日マゴツイタ處ダヨ。

とか、また三十三年の十二月二十六日に妻宛てに書いた手紙の一節――

倫敦の繁昌は目撃せねば分り兼候位、馬車、鐵道、電鐵、地下鐵、地下電鐵等蛛の糸をはりたる如くにて、なれぬものは屢ば迷ひ、途方もなき處へつれて行れ候事有之、險吞に候。小生下宿より繁華な處へ行くには馬車、地下電氣、高架鐵、鐵道馬車、の便有之候へども、處々方々へ参り候故、時々見當違の處へ参る事有之候。

さらに、三十四年二月九日の朝、東京の四名の友人たち、狩野享吉、大塚保治、菅虎雄、山川信次郎に宛てて出した手紙の一節――

九月八日に日本を出てから十月下旬に「パリ」にて博覽會を一週間許り見たが、一切何にも分らないと思ひ給へ。夫から皆に別れて心細くも英國へ着したが朋友も居らず、方角も分らず、北海道の土人が始めて東京へ修業に出た位の處さ。

などである(いずれも傍点加納)。これらはみな「倫敦塔」のはじめの部分にほとんど語句もそのまま、あるいはごくわずかに変奏させられて(「北海道の土人」が「御殿場の兎」となるのは「変装」というべきか)、登場することになる。

行つたのは着後間もないうちの事である。其頃は方角もよく分らんし、地理杯は固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の眞中へ抛り出された様な心持であつた。表へ出れば人の波にさらはれるかと思ひ、家へ歸れば

汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた（傍点加納）。

また、いま引いた「倫敦塔」のすぐそのあとにつづく一節も見よう。――

しかも余は他の日本人の如く紹介状を持って世話になりに行く宛もなく、又在留の旧知とては無論ない身の上であるから、恐々ながら一枚の地圖を案内として毎日見物の爲め若くは用達の爲め出あるかねばならなかつた。無論汽車へは乗らない、馬車へも乗れない、減多な交通機關を利用仕様とすると、どこへ連れて行かれるか分らない。此廣い倫敦を蜘蛛手十字に往來する汽車も馬車も電氣鐵道も鋼條鐵道も余には何等の便宜をも與へる事が出来なかつた（傍点加納）。

ここでも、用語や表現は二月九日付けの四名の友人宛ての便りのなかの「朋友も居らず、方角も分らず」という部分、ならびに鏡子宛ての十二月二十六日の手紙のなかの言葉と逐一对応する。同じく「倫敦塔」の血塔の場面で、エドワードⅣ世の二人の王子たちが、幽閉されている部屋から見る太陽が、――

百里をつゝむ黒霧の奥にぼんやりと冬の日が寫る。屠れる犬の生血にて染め抜いた様である（傍点加納）。

と描写されているのは、漱石の明治三十四年一月三日の日記にでてくる表現、――

倫敦ノ町ニテ霧アル日太陽ヲ見ヨ。黒・赤・ク・シ・テ・血・ノ・如・シ。鳶・色・ノ・地・ニ・血・ヲ・以・テ・染・メ・抜・キ・タル・太陽・ハ・此・地・ニ・ア・ラ・ズ

パ見ル能ハザラン（傍点加納）。

を下敷きにしているということも、私は別の論文でふれたことがある。⁽⁶⁾このように、実際に漱石がロンドンで体験したことや漱石がロンドンに着いた当時抱いたその都市の印象とか感想が「倫敦塔」という作品の描写をしつかりと支え、この作品に厚みをもたせていることは明らかであろう。⁽⁷⁾

「倫敦塔」における現実描写と「事実」

「倫敦塔」にでてくるロンドンという都市の描写が漱石自身の経験に深く根ざしていることは前述のとおりであるが、それは「倫敦塔」に書かれていることがすべて事実どおりであるとか、これが普通に言われる紀行文であるという意味ではない。漱石自身あと書きで「此篇は事實らしく書き流してあるが、實の所過半想像的の文字であるから、見る人は其心で讀まれん事を希望する」と明言している。さらにはこの作品がフィクションであることのより客観的な根拠となるのは、あの有名な書き出し――

二年の留学中只一度倫敦塔を見物した事がある。其後再び行かうと思つた日もあるが止めにした。人から誘はれた事もあるが断つた。一度で得た記憶を二返目に打壊はすのは惜しい、三たび目に拭ひ去るのは尤も残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思ふ（傍点加納）。

と、同じく有名な結び――

夫からは人と倫敦塔の話しをしない事にきめた。又再び見物に行かない事にきめた(傍点加納)。

であらう。

ここに執拗に繰り返されている「一度」性の強調は、漱石がある時点でのロンドン塔訪問の「記憶」に一つの形を与え、それ以外の在りようを否定し、ある特定の姿だけを唯一のものとして定着させようと考えていることを示している。したがって本当に漱石は一度しかロンドン塔に行かなかったのかどうか、また本当にタワー・ブリッジすなわち「塔橋」經由で塔へと近づいて行ったのかどうかと疑うことは可能であるし、漱石が実際にロンドン塔を見物したその日の足取りと、作品中の「余」の足取りとがすべて合致する必要もない。これらはすでに別の観点からではあるが、越智治雄氏により指摘されたとおりである。⁽⁸⁾

ところで大岡昇平氏は「猫」と「塔」と「館」と——作家漱石の発車——のなかで「余」が塔橋の上からロンドン塔を望む次の場面を引用している。⁽⁹⁾

此倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てゝ眼の前に望んだとき、余は今の人が將た古への人かと思ふ迄我を忘れて余念もなく眺め入った。冬の初めとはいひながら物静かな日である。空は灰汁桶を掻き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ懸つて居る。壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いて居るかと思はるゝ。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつ迄も同じ所に停つて居る様である。傳馬の大きいのが二艘上つて来る。只一人の船頭が鱧に立つて鱧を漕ぐ、是も殆んど動かない。塔橋の欄干のあたりには白き影がちらちらする、大方鵜であらう。

そして、この箇所についてつぎのようにコメントした。

ここにも文飾があつて、^⑩漱石の滞在した明治三十三—三十五年にはもう蒸気船が往き来していて、帆船や櫓で漕ぐ船は多くはなかった。漱石は中世の昔の気分を出すために、誇張しているのです。一篇は漱石が遂にテムズ河を渡つて、塔に行く。主としてリチャード三世に殺された二人の甥と、ヘンリー八世の数多い薄倖の妃の一人ジェーン・グレーの運命について、大いに感慨を催すというだけのものです。文飾の多い感傷的紀行文といつてもよく、漱石自ら案内記通りではなく、想像を加えたと付記しています。^⑪

漱石が「倫敦塔」の叙述の中では、「余」が塔橋から眺めたテームズ河に当時そこを上り下りしていたはずの蒸気船を描かず、帆船や櫓で漕ぐ傳馬船を描いているのを、大岡氏は見た事実のとおりに書かなかつた漱石があたかも悪いかのごとく評するが、この評はあたらない。作者が作品のなかでAをAと書き、なぜBと書かなかつたかを文章から読みとることこそ読者のつとめである。漱石がそれを描いていないならば描いていないで、そこにどのような意図が働いていたかを探るべきである。^⑫

漱石がなぜ「往き来していたはず」の蒸気船を描かず、帆船や櫓で漕ぐ傳馬船をそこに配したかは、興味深い問題である。大岡氏はそれを「中世の昔の気分を出すために、誇張しているのです」と説明する。手軽な劇の書き割り、舞台が中世であることを絵に描いただけで手とり早くわからせようとする。漱石もそれに類することをした、と氏は言いたいようだが、はたしてそうだろうか。漱石の文章に即して注意深く読んでみる必要があるだろう。まずさきほど大岡氏が引用したところをもう一度ふりかえつてみたい。

ここで気がつくのは「物静かな日である」、「(テームスの流れは)波も立てず音もせず、無理矢理に動いて居る

かと思はるゝ、「風なき河」、「帆懸舟の白い翼が」いつ迄も同じ所に停つて居る様である、「是（二艘の伝馬船）も殆んど動かない」といった表現の羅列である。ここには繰りかえし繰りかえし、あらゆるものが静かで、位置が変らず、いつまでたっても何の動きも見せないということが強調されている。これだけならべて漱石はなにをここに浮び上がらせようとしているのだろうか。

私には一枚の絵が見えてくる。ある冬の初めの一日、テムズ河にかかる塔橋¹³の上に立って、対岸のロンドン塔を眺めている「余」を描く漱石は、「余」の眼に映る光景を一枚の絵とかたちでとらえようとしている。その絵の中では空は「灰汁桶を掻き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ懸つて居る」だらうし、テムズの流れは「波も立てず音も」しないだらう。帆懸舟の白い翼にしても「いつ迄も同じ所に停つて居る様である」はずだし、二艘の伝馬船が「殆んど動かない」のももっともである。「大方鷗であらう」と言われている「塔橋の欄干のあたりにちらちらする」白い影は、絵筆の先で白い絵の具を点々とおくだけの、印象派風の絵を思い浮べれば、いかにもありそうである。一枚の絵のなかでその動きを停止させるには蒸気船よりは、風でしか動かぬ帆懸舟、手で櫓を漕がねば進まぬ船のほうが、停止させやすい。そればかりでなく、画中の題材として見ても、蒸気船よりは不規則な三角形の白い翼をもつ帆懸舟や、只一人の船頭が櫓に立つて櫓を漕ぐ伝馬船のほうが、動きを止めた瞬間の形はるかに美しいだらう。漱石の氣に入りの言葉で言えば「画になる」（「草枕」）のである。

このように漱石はまず、塔橋からみると「視野の中にきれいに小さなパノラマのようにおさまっている」¹⁴ロンドン塔をそのまま絵の中の塔として見るという、準備の第一段階を終える。

さきの引用部分にすぐ続くのが次の数行である。――

見渡した處凡ての物が静かである、物憂げに見える、眠つて居る、皆過去の感じである。さうして其中に冷然と二十世紀を経蔑する様に立つて居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史の有ん限りは我のみは斯くてあるべしと云はぬ許りに立つて居る。

「見渡した處凡ての物が静かである」、「物憂げに見える」、「眠つて居る」、「皆過去の感じである」、などの表現は、その前の「物静かな日」、「波も立てず音もせず」、「無理矢理に動いて居る」、「いつ迄も同じ所に停つて居る」、「殆んど動かない」などと似ている。しかし注意して読むと、外形が動かずスタティックであるというだけの形容を一步こえて、その内側さえ「物憂げ」で「眠つて居る」と、押し進めている。さらにそのつぎの「皆過去の感じである」には、動きが単にとまっただけではすまず、過去にさかのぼるという、逆向きの運動性すら示唆されはじめ。ここまで見てくれば、もう漱石がなにかに向つて意識的に筆をすすめているらしいことが感じられてくる。

そのつぎに数行おいてあらわれるのが、ついに「余」が橋を渡ることになる場面である。

余はまだ眺めて居る。セピヤ色の水分を以て飽和したる空気の中にぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を吾が脳裏に描き出して来る。朝起きて啜る抹茶に立つ煙りの寝足らぬ夢の尾を曳く様に感ぜらるゝ。暫くすると向ふ岸から長い手を出して余を引張るかと思ひ来た。今迄佇立して身動きもしなかつた余は急に川を渡つて塔に行き度なつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門迄馳せ着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は現世に浮游する此小鐵屑を吸収し了つた。

「余はまだ眺めて居る」、「ほんやり立つて眺めて居る」……、そうしてある長さの時間が経過してはじめて（おそれなくそれなりの長さの時間が必要なのだ）、ゆっくりと「二十世紀の倫敦」が彼の「心の裏から次第に消え去」つていき、かわつて「眼前の塔影が幻の如き過去の歴史」を彼の「脳裏に描き出して来る」のである。

こうして準備の第二段階ができたところで、いよいよ「長い手」の登場となる。「暫くすると向ふ岸から長い手を出して余を引張るか」と怪しまれて来た、「長い手は猶々強く余を引く」、「長い手はぐいぐい牽く」……と書かれているこの手の力によって、「今迄佇立して身動きもしなかつた余」は「急に川を渡つて塔に行き度なり」、「忽ち歩を移して塔橋を渡り懸け」、「塔橋を渡つてからは一目散に塔門迄馳せ着け」るのである。そうすると「見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は現世に浮游する此小鐵屑を吸収し了つた」というのである。

「暫くすると向ふ岸から長い手を出して余を引張るか」と怪しまれて来た、「長い手は猶々強く余を引く」、「長い手はぐいぐい牽く」という表現は、具体的に眼の前の光景のどこかの部分から手が伸びてくるところを想像してみると、きわめてグロテスクである。怪談じみてもいる。漱石はこのとき江戸時代以来の怪談ばなしを思い浮かべていたのだろうか。ともかくこの超自然的な長い手の登場は唐突だ。しかしまず眼前の河と船の動きを停め、時間を停め、否、逆行させたりえで、なお一つ未解決で残されていた課題、すなわち「余」が今いる場所と、入つて行くべき場所であるロンドン塔との距離を解消させる方法としては、この「長い手にぐいぐい牽かせる」やり方しか漱石には思いつかなかつたのであらう。

ところで最後の「見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は現世に浮游する此小鐵屑を吸収して了つた」という一文は、絵の世界の中に人間が小さくなって入っていくという話を思いださせる。むしろ漱石がここで「余」を「此小鐵屑」と呼ぶのは三萬坪の広さの敷地に、人ひとりの大きさを対比させたときのとえからではあるのだが、しかし用いられている言葉に着目すると、「一大磁石」に対する「小鐵屑」という語によつてもたらされるのは、き

わめて微小な一片の砂鉄というイメージである。ついさっきまで並のサイズの人間であった「余」が、まるで一瞬のうちに砂粒ほどの小ささにまで収縮してしまい、自分の眼前にある、さきほど描かれたばかりの一枚の絵の中の世界に入ってしまったように思われてくる。

民話や伝説や奇譚のたぐいに、絵のなかの人物が実世間に出てくるとか、人間が小さくなってそのまま絵の中の世界に入っていくというものがある。むしろ「倫敦塔」のこの箇所の叙述に直接のつながりはないだろうが、人間が絵の中に入っていくという話で思い出されるのは、ラファディオ・ハーンが石川鴻斎（一八三三—一九一八）の『夜窓鬼談』（明治二十四年）に拠って再話した「果心居士のはなし」である。時は天正年間、所は京の都、果心居士は地獄の絵図の掛け軸を人々の集まるところで開いて見せては仏道を説いていた。その絵の評判を聞いた織田信長やその家来や明智光秀らが種々策をめぐらしてその絵を果心居士から奪おうとする。最後に光秀に呼び出された果心居士は、その部屋においてあった近江八景を描いた屏風の中の絵に描かれている琵琶湖から漕ぎ出してきた一隻の小舟に乗ってその絵の中に入っていく、ついに見えなくなってしまうという話である。

「常態を失う」に至る道

この「倫敦塔」という作品は一読するとわかるように冒頭にまず二十世紀初頭の当時の世界最大の都市ロンドンの描写がでてくるが、作品自体の本体はやはりロンドン塔内部にあるだろう。その本体で語られるのは、ひとつは英国史中の人物のうち、他人の権力への野心のための犠牲になった哀れで健気な、エドワードの幼い王子たちや、その母エリザベス、そして「九日間の女王」ジェーン・グレイなどである。もうひとつは「余」という日本からのひとりの見物人の眼に映る、ごく普通のイギリス人の日常的な仕草や態度である。血塔の前に立つ「頗る真面目な

顔をして居るが早く當番を済まして……一件にからかって遊び度といふ人相」の番兵、そして「余」を日本人と見て「微笑しながら」古い日本の鎧一揃いが飾つてあるところに案内してくれる「あまり背の高くない、肥り肉の白髪が多い」白塔の番人ビーフ・イーターなど、走り書き的デッサンながら、魅力的にここに描きとめられている。なによりも、最後に処刑されるジェーン・グレーの「前ジテ」的人物である、七歳ばかりの男の子をつれた、しかしカラスにパンをやりたいとねだる子供には取り合わない、母親らしさの稀薄な美しい若い女が面白い。この女が主人公といつてもよい。このような梗概から見てもこの「倫敦塔」がもう、単なる紀行文や見聞録の域をこえてひとつの小説の世界をつくりあげようとしていることはわかるであらう。⁽¹⁵⁾

そしてその導入部分にあたるロンドン市内の描写と、本体である物語の世界とをつなぐところに位置しているのが塔橋である。その塔橋に着目し、なぜ漱石はロンドン塔を見物するのに塔橋を経由せねばならなかったのかという問題意識のもとに、ひとつのすぐれた解釈を提示したものが前掲の越智論文であった。越智治雄氏は「漱石の内部に一つの構図がおそらく用意されていた。川のこちらに日常生活の場があり、川を隔てて「別世界」がある。そしてある日、一人の男が橋を渡ってその別の場所を訪問するのである」と解したのである。

この解釈をもとにすれば、漱石がなぜ「倫敦塔」のなかで、「余」が橋をわたるときに、あのように長く、手間をかけたかが理解されてくる。われわれの周囲にある橋は普通、渡ろうと思えばすぐに渡ることができるものである。そのような普通の橋の向う岸は、越智氏のいう意味での「別世界」ではない。だが漱石の内部の構図を越智氏のいうようなものと理解すれば、「倫敦塔」という作品の中の「塔橋」というこの橋は、こちらの日常世界と向う側の別世界を、結ぶというよりはむしろ隔てるための橋として漱石に意識されていることになる。そうであるならばこの塔橋は決して容易に渡れる橋であつてはならない。本来は隔てられてあるべきものを「余」に越えさせるためにはそれ相当の手續きを必要とする。そう考えて漱石はその仕掛けとしてさきほど見たような工夫を凝

らしたのではなかったろうか。ここで思い出されるのは能の舞台で使われる「橋掛り」である。橋掛りもある空間から、もう一つの異質な空間へ入っていくための重要な仕掛である。漱石の「倫敦塔」において「塔橋」は、能舞台における橋掛りの役割を果たしているのではあるまいか。

註(6)に掲げた論文のなかで私は、「倫敦塔」の後段に登場する、男の子をつれた若い美しい女と、処刑される場面が描かれているジェーン・グレーとが、複式夢幻能の前シテと後シテの関係に酷似しているとのべた。「倫敦塔」という作品の中に能の要素を読みとることができると思うのはそのときである。その後この作品を読み返してみると、今度は能でいう「道行」にきわめて似ている箇所があるのに気づいた。それは、塔橋を渡り終えた「余」が空濠にかけてある石橋を渡り、「中塔」をくぐり(これは漱石の記憶の誤りで、実は中塔ではなく、「側塔」、鐘塔の脇を通り、逆賊門を見たところで左に折れて、いよいよ第一のドラマの舞台である血塔へと至るまでの部分である。能における道行は、たとえば京の都から奥州まで、関東から日向までなどの五百キロ、千キロという空間を、わずか数行ないし数十行の台詞で越えていく。それに似て漱石はここで、ロンドン塔を舞台として繰りひろげられた五百年余りの歴史をやはり数十行で駆け抜けていこうとしている。これは「時間的」道行と呼ぶことができるのではないだろうか。

そして、今また塔橋が「橋掛り」的役割を果たしている、あるいはそう解釈し得るということが浮び上がってきたわけである。ロンドン塔という、建物の形状にしても、大都市ロンドンの真ん中にあるその位置にしても、それになまつわる歴史にしても、最も典型的にイギリス的のといつてよいものを、漱石が意識的にか、無意識的にか、能の枠組みで把握したことは、私にはきわめて興味深く思われる。その意味をもう少し掘り下げてみる必要があるが、それは稿を改めて試みるつもりである。

ところで本稿冒頭に石川淳の「倫敦塔その他」を引いたが、そこにすぐ続く一節はつぎのようなものであった。

「倫敦塔」の主人公は塔の門に入つたとき「余は此時既に常態を失つて居る」といふ。わたしが氣に入つたのはおそらくそこである。常態といふやつはむかしからどうもおもしろくなかつた。(中略)「倫敦塔」は、あとから見ると、謂ふところの自然主義にかたむきかけた文學の世界に事あらしむべき運動のきざしであつた。いや、餘事はともかく、讀者であるわたしは主人公の案内に依つておなじやうに常態をうしなつてゆくといふ有益な経験を与えた。

ここで石川淳の言う「余は此時既に常態を失つて居る」という一句はさきに引用した箇所、すなわち、「塔橋を渡つてからは一目散に塔門迄馳せ着けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は現世に浮遊する此小鐵屑を吸収し了つた」に続く次のパラグラフの末尾におかれてゐる句である。

門を入つて振り返つたとき、

憂の國に行かんとするものは此門を潜れ。

永劫の呵責に遭はんとするものは此門をくぐれ。

迷惑の人と伍せんとするものは此門をくぐれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。

我が前に物なし只無窮あり我は無窮に忍ぶものなり。

此門を過ぎんとするものは一切の望を捨てよ。

といふ句がどこぞに刻んではないかと思った。余は此時既に常態を失つて居る(傍点加納)。

冒頭のロンドン市内の描写にはじまり、あの塔橋の上での長い心理的準備を経て、さいごにダンテの『神曲』の「地獄篇」の地獄の門の銘まで引いて漱石がしようとめざしてきたもの、それはまさしくひとに「常態を失」わせることであつた。そこを中学生の石川淳もしっかりとうけとめていたのだ。

〔註〕

(1) 『石川淳選集』第16巻、岩波書店、昭和57年、二七〇ページ

(2) 荒正人『増補改訂漱石研究年表』集英社、昭和59年、三六九—三七一ページ

(3) 『倫敦短信』(『画筆の跡』、日本美術学院刊、大正三年)、『世界紀行文全集、イギリス編』所収、修道社、昭和三四年、

一六二ページ

(4) 『豌豆の花(倫敦)』(『夢作る人』内外出版株式会社、大正十三年七月)同右所収、二二〇ページ

(5) 漱石の英国留学の概略と、その英国体験を叙述した作品についてここに記しておく。

文部省から「英語研究ノ為メ」イギリス留学を命じられて一九〇〇(明治33)年九月八日に横浜を出た夏目漱石がロンドンに到着したのは同年十月二十八日だった。その日から日本に帰る船に乗りこむ一九〇二(明治35)年十二月五日までの約二年と一か月が、漱石のイギリス体験の時代である。この二年のうちでロンドン到着後ほんの数日めにケンブリッジに行つて一泊したときと、帰国の一か月ほど前にスコットランドのピトロクリ(Pitlochry)に一週間ばかり逗留したとき以外は、漱石はずっとロンドンで暮らしたのであった。

漱石のイギリスでのこの二年間の経験が記されているものには、まず日記ならびに近親者や友人に宛てた書簡がある。また身のまわりの出来事を書きつづつてロンドンから日本に送った、いわゆる「日記体」の「倫敦消息」(『ホトトギス』掲載、明治36年)や「自転車日記」(同誌掲載、明治37年)がある。俳句も横浜を発する時、船の上、ロンドン見物の途上で、ロンドンでの読書と研究の合間に、そして親友正岡子規の死の報に接した時など、その折々に漱石の心の内奥を垣間見させるような実にいい作品がこの期間中に三十数首詠まれている。家族を置いてひとりでイギリスに向けて出発するときの「秋

風の一人を吹くや海の上」、インド洋を渡っているときの「雲の峰風なき海を渡りけり」、ロンドンに到着してほどこころの「空狭き都に住むや神無月」、あるいはロンドンの自分の下宿生活を詠んだ「三階に獨り寐に行く寒かな」、また正岡子規の計を聞いたときの「手向くべき線香もなくて暮の秋」「霧黄なる市に動くや影法師」などである。

帰国後、漱石は明治三十六年四月から四十年三月にかけて東大の英文学科で「英文学形式論」、「文学論」、「文学評論」という三つの講義を行なったが、これらの英文学研究もまた漱石のイギリス体験の資料として読むことができる。さらにイギリスでの漱石の経験や、イギリスの歴史と文学に材を採った四つの作品が、江藤淳氏が「漱石の創作力が最初の奔出を示した時期」とよぶ（『漱石とアーサー王傳説』一九七五年、東大出版会、P. 10）明治三十七年秋から翌三十八年にかけての一年半の間に書かれた。それは「倫敦塔」「カーライル博物館」「幻影の盾」「薙露行」の四篇で、いずれも漱石の英国体験および英国の歴史や文学と密接に関わるものである。またそのあと、明治四十年に東大を辞めて朝日新聞社に入社した漱石は、「虞美人草」「抗夫」「三四郎」という三つの小説の連載に続いて、四十二年の新春、朝日新聞誌上に「永日小品」と題する二十五篇（大阪朝日新聞には二十五篇が連載されたが、東京朝日新聞に掲載されたのはそのうちの十九篇）の短い作品を発表した（明治43年刊『四篇』所収）。そのなかに漱石のイギリス時代の見聞や体験を素材としたものが七つみられる。「下宿」「過去の匂ひ」「暖かい夢」「印象」「霧」「昔」「トレイグ先生」である。

以上にあげたものが、長短はさまざまだが一個の作品の全体がイギリスに関連のあるものである。ほかにたとえば「吾輩ハ猫デアル」や「道草」などの長編小説、また種々の回想録や講演や談話のなかで部分的にイギリスのなんらかの側面に話題が及ぶものまでみていけば、さらにその数は増すことになる。漱石のイギリスでの留学生活はわずか二年と一か月にしかすぎなかったが、その間の彼の体験が直接あるいは間接に反映されている作品は、このようになら多い。

(6) 加納孝代「『倫敦塔』——黒き塔の影、堅き塔の壁」（『国文学解釈と鑑賞』一九八八年八月号、至文堂）

(7) もっともそれはかならずしも漱石が「倫敦塔」を執筆した際に日記や書簡を手元においてその表現を逐一参照したという推測には結びつかない。日記やメモ類（全集で「断片」としてまとめられているもの）は資料として利用したかも知れない。また妻宛ての手紙もあるいは妻に言って取り出させたかもしれない。しかし友人宛ての手紙などは、執筆のために彼が回収したかどうか。その可能性は薄いと思う。むしろここでかえってうかびあがってくるのは漱石のロンドンの印象の記憶の鮮明さではあるまいか。と同時に四年後に書かれた「倫敦塔」において、おそらく前稿を参照もしないのに表現がより洗練されたものとなって現われる点にも驚かされる。その一例が友人あての手紙に「北海道の土人が始めて東京へ修業に出た位の

處さ」とあるところが「倫敦塔」で「丸で御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出された様な心持であつた」となっているところであらう。

(8) 越智治雄「倫敦塔再訪」(「漱石と文明」砂子屋書房、昭和六十年)

(9) 「猫」と「塔」と「館」と——作家漱石の発車(「大岡昇平」小説家夏目漱石「筑摩書房、一九八八年」三九ページ)

(10) 大岡氏はこの直前にも(三八ページ)、「倫敦塔」の冒頭の部分、——△二年の留学中只一度倫敦塔を見物した事がある。其後再び行かうと思つた日もあるが止めた。人から誘はれた事もあるが断つた。一度で得た記憶を二返目に打壊はすのは惜い、三たび目に拭ひ去るのは尤も残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思ふを引いて、「これは多分うそで文飾です。なん度か行つて印象を確かめ、案内記を参照し、他人の印象記や歴史画を参照にして書いたのだらうと思います」と、批判している(傍点加納)。しかし作者が作品を書く際に何度かその場所に行つてたしかめたり、案内記や他人の印象記を見たり、関係する絵画や資料を参照しても構わないことは言うまでもない。

(11) 大岡氏がジェーン・グレーをヘンリー八世の数多い薄倖の妃の一人といっているのは誤りで、ジェーンはエドワードⅥ世のいとこで、ギルフォード・ダッドレーの妻 Lady Jane Grey, (1537-1554)である。また「倫敦塔」という作品が「主としてリチャード三世に殺された二人の甥と、……ジェーン・グレーの運命について、大いに感慨を催すというだけ」の、「文飾の多い感傷的紀行文」であるという氏の見方には賛成しかねる。別の機会に反論するつもりである。

(12) 作品は別であるがこのような問題意識と方法によって、漱石の「永日小品」中の「昔」を解釈したのが、平川祐弘氏の「汽車の走らぬ世界——漱石にとつてのビトロクリ——」(「講座夏目漱石」第五巻所収、有斐閣、昭和五十七年)である。平川氏はすでに汽車が通じていたはずのスコットランドの村ビトロクリを描いた「昔」になぜ汽車の姿が見えないのか、その理由を、同じ場所を三十年前に訪ねて、その汽車の強い印象を書きのこしている久米邦武の「米欧回覧実記」と対比させながら、意識的に作品から汽車を排除しようとした漱石の心的世界を深く理解しようとした。

(13) 塔橋 (Tower Bridge) は、中央に二つのゴシック風の塔、また河岸に橋を吊るすロープを支えるためのやや小さい二つの塔をもち、中央の二つの塔の間が開閉する跳ね橋である。ロンドン・ブリッジの下流、ロンドン塔に最も近いところに位置している。橋が開く時は車の通行は遮断されるが、人はリフトで塔にのぼり、上の橋を歩いて渡ることができる。八年の工事の後、一八九四年に開通した。中央の二つの塔の間、すなわち開閉する跳ね橋の部分は七十メートル、河岸からもう一方の岸までの長さは二六六メートル、またアプローチを含む橋の全長は八百メートルである。

- (14) 越智治雄、前掲論文、六八ページ
- (15) Lafcadio Hearn: *A Japanese Miscellany* (「日本雜錄」1901) 所収の「The Story of Kwashin Koji」
- (16) 「倫敦塔」の中に小説としての構成という面でどのような工夫が凝らされているかということについていく大まかながら述べたのが私の前述の論文であった。

